

4. 「実践力」をつける

4.1. 日本赤十字社救護・福祉部が主催する研修会への参加（平成 26 年度日本赤十字社 第 2 ブロック 支部災害救護訓練 運営スタッフ）

2014 年 11 月 3 日（月）～4 日（火）

さいたまスーパーアリーナ

日本赤十字社は様々な研修会や訓練を通して、多様化する災害に対応し、長期化する被災者の避難生活を支援するため救護班員を育成しています。

学生は、これら日本赤十字社が主催するこれら研修会や救護訓練にインストラクターまたは運営スタッフとして参加しました。

参加者：埼玉県を含む関東 6 都県の赤十字救護班と赤十字ボランティア、市消防局及び大学や看護学校の協力を得て、およそ 500 名

目的：第 2 ブロック管内で災害が発生した際に、第 2 ブロック支部が主体となり、広域支援活動を円滑に行い、さらには相互に連携して統制のとれた災害救護活動を行うこと（日赤は全国を 6 ブロックに分け、ブロック内で毎年訓練を実施）

【学生の学び】

池田稔子（2014 年入学）

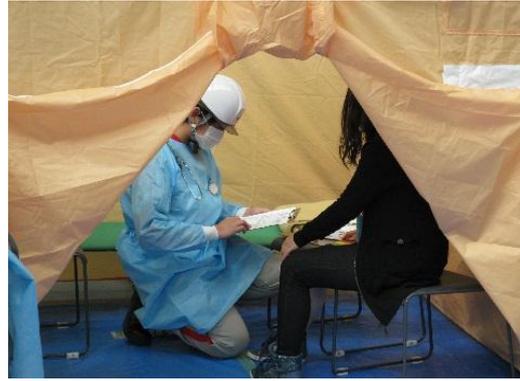
日本赤十字社は、災害救護業務を本来の使命とし、指定公共機関として直ちに被災者の救援にあたる重要な任務を有しています。このことから各支部は、平時から災害救助活動に必要な知識や技術を習得するための訓練を行っています。

訓練前日の 2 日、さいたま市南部を震源とする震度 7 の首都直下地震発生し、さいたま市内は家屋の倒壊、道路損壊等で大きな被害が発生している想定でした。

当日の私の役割は、傷病者役のボランティアの想定付与とコントロール全般、訓練開始後は緑エリアのファシリテートでした。訓練までの 5 回の打ち合わせを経て当日に臨みました。展示型訓練ではなく、あくまでも実災害の想定とマニュアルの検証のための厳しい見方を心掛けて、スタッフ間でシナリオを練りましたが、具体的に訓練運営に携わることで多くの人々との連携や業務分担および進行状況のすり合わせや修正をタイムリー行うことのむずかしさを痛感しています。今後も企画運営の機会を逃さずに、災害対応の学習に邁進したいと思っています。



<問診と手当て>



<診察と処方箋作成>



<資機材の準備>



<振り返り会>

4.2. 日本赤十字社救護・福祉部が主催する研修会への参加（「救護員としての赤十字看護師研修」講師）

2015年8月12日（水）、8月14日（金）

さいたま赤十字病院

日本赤十字社は様々な研修会や訓練を通して、多様化する災害に対応し、長期化する被災者の避難生活を支援するため救護班員を育成しています。

学生は、これら日本赤十字社が主催するこれら研修会や救護訓練にインストラクターまたは運営スタッフとして参加しました。

対象：さいたま赤十字病院のラダーⅡ以上の看護職員で救護班要員を目指すもの

内容：「災害および災害看護概論」「災害が自然環境や社会、人々の生活に及ぼす影響」「トリアージの実際」「災害発生時の初動体制（院内体制構築；受援含む、救護班としての出動）」など

【学生の学び】

池田稔子（2014年入学）

赤十字救護班救護看護師育成のために、各赤十字病院では赤十字看護師研修を実施しています。私は数年前から、本研修会の講師として講義とシミュレーションなどを担当しています。

近年では、災害拠点病院の義務として日本DMAT研修会の受講が進められています。また、頻発する災害に対して、救護班としての出動も多くなり、そのせいか、救護班要員を希望する看護師も増えてい

ます。しかし、災害医療は普段病院で行っている救急医療と異なります。災害発生時の初動体制の構築のノウハウは、日本 DMAT や全国赤十字救護班研修会、ACT 研究所、MCLS (Mass Casualty Life Support)、そして出動経験者の体験や学びを参考にしています。人に伝えることは対象のレディネスを考え、内容やその順番を構築することであり、そのための準備や実施後の評価などは、DNGL で学んだ研究の視点が役に立ちました。今後も災害看護を様々な角度で学習し、それを還元する機会を積極的に作っていきたくと考えています。



4.3. 日本赤十字社救護・福祉部が主催する研修会への参加（日赤災害医療コーディネータ研修会） 毎年、2日間コースを3回、（直近は2015年8月18日（火）～19日（水））

日本赤十字社本社

日本赤十字社は様々な研修会や訓練を通して、多様化する災害に対応し、長期化する被災者の避難生活を支援するため救護班員を育成しています。

学生は、これら日本赤十字社が主催するこれら研修会や救護訓練にインストラクターまたは運営スタッフとして参加しました。

対象：日本赤十字社認定の災害医療コーディネータチーム

内容（研修会意義）：「災害対応の現状」から具体的な活動を考え、日赤災害医療コーディネータチームの活動の方向性を導き出し、共有化する

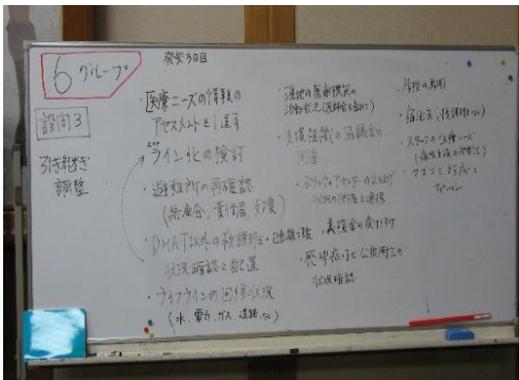
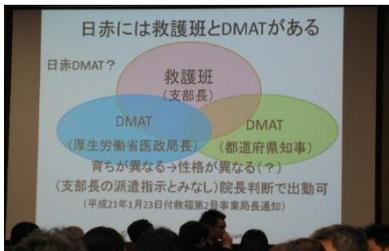
【学生の学び】

池田稔子（2014年入学）

災害医療コーディネータの目的は災害時、混乱した医療体制を速やかに復旧することにあります。わが国で初めての災害医療コーディネータ制度は、阪神・淡路大震災の教訓をもとに1997年に兵庫県で

導入され、災害拠点病院の医師が任命されました。新潟県では新潟県中越地震後に各保健所長が災害医療コーディネーターに任命され、翌年に発生した新潟県中越沖地震において、重要な災害医療のかじ取りを行いました。東日本大震災では、甚大な被害によって広域にかつ長期間にわたり地域医療体制の機能が麻痺し、行政機能も低下した状況下で、被災地域医療の窓口としてこの災害医療コーディネーターが大きな役割を果たしました。

日本赤十字社は一つの法人で 92 病院、48,000 人以上の医療職を有する稀有な団体です。保有救護班はおおよそ 500 チーム、6800 人が要員登録されています。1つの災害で様々な団体が協働することになります。しかしながら、協働と一言と言っても平時に活動を共にしていない者同士が、災害時にスムーズに調整し合うことは困難です。そのために、平時から要員それぞれが災害コーディネートについて学ぶ必要がありました。私は、本研修会の運営スタッフですが、コーディネータースタッフとしても、都道府県のコーディネーターをはじめ、関係する方々や機関と緊密な関係を取っていくための方法を考え、日赤災害救護のスキルアップを図るためにも、研修、訓練の企画や運営に携わっていきたいと考えています。



4.4. 日本赤十字社救護・福祉部が主催する研修会への参加 (平成 27 年度 大規模地震時医療活動訓練)

2015 年 9 月 1 日 (火)

さいたま赤十字病院

日本赤十字社は様々な研修会や訓練を通して、多様化する災害に対応し、長期化する被災者の避難生活を支援するため救護班員を育成しています。

学生は、これら日本赤十字社が主催するこれら研修会や救護訓練にインストラクターまたは運営スタッフとして参加しました。

【学生の学び】

池田稔子 (2014 年入学)

平成 27 年 9 月 1 日、平成 27 年度政府総合防災訓練における大規模地震時医療活動訓練に参加しました。この訓練は毎年 9 月 1 日「防災の日」に行われ、私は昨年まで、日本 DMAT のコントローラーとして参加していましたが、本年度の被害想定が東京湾北部を震源とする首都直下地震でしたので、自身が勤務していたさいたま赤十字病院の災害対策本部役としてプレイヤーとして参加することにしました。この訓練は、日本全国の災害拠点病院の DMAT や救護班、県や市町村、自衛隊、消防、SCU としての各地 SA を巻き込んだ大規模訓練です。この訓練では、被災地で発生した多数傷病者を被災地内の病院で受け入れ、陸路や空路を使って被災地域内外の最終治療が受けられる場所へ移動させます。そのために重要なのが情報の収集と統制です。全国のプレイヤーがそれぞれの立場で、何をすべきかを考える訓練でした。

私は、院内災対として、院内の被災情報や来院する患者の新設エリアでの状況を吸い上げ、受け入れた傷病者リストの作成・病院としてのクロノロを作成し、情報の整理をしていきました。上位組織と院外との情報交換を行うためには EMIS や防災行政無線を活用しますが、一度に全国のアクセスが集中するために混乱や機能不全の状況が生じました。これは、訓練をして初めてわかることです。

また、受援として複数の DMAT を受け入れ、診療補助や傷病者搬送に関する情報について上位組織を通して依頼しました。病院として地域外搬送が必要と考え、5 名の患者を SCU に搬送しました。

私は、今まで種々の災害対応研修会に参加してきました。また、この 2 年間で DNGL で災害看護を学んできました。これらの知識や演習と訓練で得たものを統合し体现するために、今後は実災害における災害対応の機会を持ちたいと考えています。災害時対応のコーディネーターが出来る人材を目指して、更に精進したいと考えています。



4.5. 日本赤十字社救護・福祉部が主催する研修会への参加（全国赤十字救護班研修会）

毎年、3日間コースを4回、（直近は2015年9月19日（土）～21日（月））

日赤本社および各地の赤十字病院や支部

日本赤十字社は様々な研修会や訓練を通して、多様化する災害に対応し、長期化する被災者の避難生活を支援するため救護班員を育成しています。

学生は、これら日本赤十字社が主催するこれら研修会や救護訓練にインストラクターまたは運営スタッフとして参加しました。

対象：医師・看護師・事務職・薬剤師・放射線技師・臨床工学技士などの様々な職種

内容：近隣・局地災害と広域災害対応についての講義、机上シミュレーションと演習

【学生の学び】

池田稔子（2014年入学）

本研修会において3日間を通し積み重ねた知識から、情報管理やこころのケアも踏まえ、救護所運営実習で学習内容を統合させます。また、受講した救護班員の中には指導スタッフ候補生としてその後の研修会に参加します。そのため、指導のツボの作成とコースも実施しています。

研修会の目的は、日赤の災害医療資源を生かし、48時間以降を見据えた超急性期の災害医療対応ができること、そして、DMAT・救護班という単位ではなく、組織として考える力を持つ救護班員を育成することです。私はこの研修会に平成20年から関わり、プログラム作成に携わり、研修会ではグループワークや演習のファシリテートをしています。その間、東日本大震災・各地の豪雨豪雪災害や竜巻・御嶽山噴火があり、その都度、出動した救護班の活動報告を共有しています。

現在、災害対応は日赤のみではなく、日本DMAT、医師会、看護協会、薬剤師会、DPAT、歯科医師会等が行っています。被災者支援に必要なことは、災害超急性期より復興期に至るまでのシームレスな対応です。本研修会では災害対応の共通言語や知識・技術を学ぶことと協働することの重要性を伝えています。



4.6. 「て・あーて 東松島の家」での被災者支援活動

2015年9月29日・30日の2日間

宮城県東松島市「て・あーて 東松島の家」を拠点としたサポートセンターでの活動

「て・あーて 東松島の家」は、宮城県東松島市をケアの拠点とし、地元完結型のコミュニティーモデルを発信しています。震災で医療が破綻した中、古くから人に寄り添い手を握ったり、肩に添えたりする中で人の手が果たしてきた役割、治療や看護の基本であった手当への価値を見つめなおし「て・あーて」という言葉を作ったそうです。その活動は4年以上に及び、「なでしこ茶論」や「仮設住宅訪問」を行っています。

【学生の学び】

山内万裕美（2015年入学）

私たちは、夏季休暇を利用し「て・あーて 東松島の家」を訪れ、活動に参加させていただきました。「仮設住宅訪問」では、サポートセンターの方たちと連携を取りながら、住民の方の心身の健康面のサポートを行っている状況を学びました。長期に及ぶ仮設住宅の生活を余儀なくされていることからくる、よい健康状態を維持することの難しさや、少しずつ復興住宅に移り住む方が増え環境が変化することから新たに起こる問題など、現地で実際に触れ合っこそ気づき、感じられることが沢山ありました。また、「なでしこ茶論」には、20名近くの住民の参加があり、2時間の開催時間中参加者の笑い声や楽しそうな話し声が響いていました。フットケアやハンドマッサージ、爪切りなどをしていただき、住民の方はリラックスできるこの時間を心待ちにしていると話されていました。私自身も自分の手を見つめ、何ができるだろうと考える貴重な時間を持つことができました。

